

動物園の生態的展示における見学者の着眼点と受容に関する実験的研究

11505 大槻由弥
指導教員 市川智史教授

1. はじめに

今日、動物園では展示の工夫に力を入れている。展示方法の1つとして「生態的展示」が注目されている。動物園の来園者は「生態的展示」を見学した時、どのようなことに気づき、どのように感じるのか。見学者が「生態的展示」の意図を受容できていなければ、展示の持つ力が発揮されているとは言えないと考えられる。そこで本研究では、展示見学者の反応を実験的に把握することを通して、「生態的展示」の意図の受容の状況を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

実験的調査を行う前に天王寺動物園へ訪問し、天王寺動物園における「生態的展示」の意図や特長について話を伺った。事前に見学者（協力者）を選定し（13人）、天王寺動物園の「アフリカサバンナゾーン」を午前（調査1）と午後（調査2）の2回見学し、いずれも見学後は設問を設定した自由記述回答形式の調査票への記入を行った。午後（調査2）は、展示方法の説明という働きかけを行ったうえで実験的調査を実施した。

3. 結果・考察

生態的展示の特長は、「動物の生息環境を再現し、動物たちのあるべき姿を風景と共に感じることができること」である。この特長を以下の4つの観点に整理し、自由記述に書かれた見学者の着眼点の分析を行った。

生息環境・自然の中に入って見学できること

（記述例）・草がイメージより多い。

・動物がいる所以外の場所もサバンナっぽくしてあった。

生息地での動物の暮らしを見られること

（記述例）・キリンが首を曲げて、下の方の草を食べていた。

生息地の動物（肉食・草食など）を同時に見られること

（記述例）・草食動物が同じ所にいた。

・同じ場所に色々な動物がいた。

動物との距離感が実感できること

（記述例）・迫力がある。

調査1では、生態的展示の設計や の項目に関する着眼点が多かった。今までの展示は檻の中にいる動物を見ることが多く、生態的展示のような展示は初めてで新鮮さを感じたようだ。調査2では、 の項目に関する着眼点が増えた。このことは若干ではあるが、展示方法の説明が「生態的展示」の特長の受容に対して効果が見られたと捉えられる。調査2は「おやつタイム」と重なったこともあり、動物の食餌行動に関する着眼点も増えた。

まったく働きかけがない状態であっても、約半数の見学者は「生態的展示」の特長に対して目を向けることができ、「生態的展示」の特長や意図を受容できることが明らかとなった。しかし、残りの約半数は、何も働きかけがなければ、特長や意図の受容は困難であると考えられる。このこと背景としては、動物園は「動物を見に行くところ」、「娯楽施設」という意識があることが指摘できる。